



ご家族に囲まれ1月4日に慶寿園で開かれた114歳の誕生日祝い。ご自身で特製ケーキのろうそくを吹き消し、車いすで移動するなど元気な姿を見せた皆川ヨ子さん。多くのかたが、来年も、また次の年も一緒に祝いできると信じていました。突然の訃報に、町は驚きと悲しみに包まれました。



おらかな性格で笑顔を絶やさず、いつも周囲を気遣った皆川ヨ子さん。拝むようなくさど「ありがとう、サンキュー」が口癖でした。



長寿世界一という記録と、こぼれる笑顔の記憶。 いま、心から言いたい。ありがとう、と。

町では、浦田町長の発案で「皆川ヨ子さんが世界最高齢となった1月29日を記念して町全体で健康について考える日にする」と検討していた矢先でした。悲しきは反響が母娘が、これからもヨ子さんの生き方を学び、町の健康づくりを進めていく方針です。

いつも感謝の気持ちを表し、時には冗談も交えながら、わたしたちに健康長寿の素晴らしさと心穏やかに生活することの大切さを教えてくださった皆川ヨ子さん。その人柄も含めて、紛れもなく町の誇りでした。最後に、親しみと哀悼の意を込めて、いつもあなたが口にしていた言葉を捧げます。

「ヨ子さん、ありがとうごさいます。」
「ヨ子さん、ありがとうごさいます。」

くなる20日ほど前から食事ができず、点滴だけになっていったそうです。このころ、声が出なかつたヨ子さんですが、目と手で感謝の気持ちを表していたといいます。亡くなる前日の8月12日は、手があがらないため、ご家族に口の動きだけで「ありがとう」と伝えました。8月13日、一日眠つた様子で、明日また起きるだろうと周囲は思っていました。眼の延長線上で永眠されたそうです。

死に際し、初孫の安永昭俊さんは「天寿を全うしたようで、穏やかな顔でした」と様子を語りました。かつて同居し、毎日のように面会した喪主の平山美智子さんは「安らかな最期だったと思います。よく頑張つたねと喜んであげたい。1週間ほど前に、私の名前を久しぶりに呼んでくれました」と振り返りました。慶寿園の立花敏朗施設長は「チャーミングなくさどが心に残っています。常に周囲を気遣つてくださる心優しい人でした」と唇をかみしめました。

6月26日まで肺炎で入院したヨ子さんは、その後、慶寿園に戻り、酸素吸入器をつけて生活。回復の兆しも見られましたが、亡くなる20日ほど前から食事ができず、点滴だけになっていったそうです。このころ、声が出なかつたヨ子さんですが、目と手で感謝の気持ちを表していたといいます。亡くなる前日の8月12日は、手があがらないため、ご家族に口の動きだけで「ありがとう」と伝えました。8月13日、一日眠つた様子で、明日また起きるだろうと周囲は思っていました。眼の延長線上で永眠されたそうです。



8月16日、自宅近くの定善寺でしめやかに営まれた告別式。約150人が参列し最期の別れを告げた。喪主は四女の太田清子さんと孫の平山美智子さん。



安らかに、眠るように天寿を全う。 最期まで感謝の気持ちを口にした皆川ヨ子さん。

世界最高齢で福智町名譽町民の皆川ヨ子さんが、8月13日午後5時47分、入所していた上野の特別養護老人ホーム「慶寿園」で老衰のためこの世を去りました。114歳7か月でした。翌日、自宅で飯後夜が行われ、15日に通夜、16日に告別式が自宅そばの定善寺で営まれました。祭壇には、微笑みを浮かべた遺影が多くの花に囲まれ、ギネスの認定証と名譽町民章が飾られています。

式では、浦田弘二町長が「町に誇りと健康長寿のまちづくりを進めていきます」と、早辞を述べ、およそ150人の参列者が最後の別れを告げて、「冥福をお祈りしました」。

皆川ヨ子さんは、明治26年1月4日、福智町上野(旧上野村)で生まれました。53歳で夫を亡くし、野菜や花の行商をしたながら4男1女を育て、孫7人、ひ孫12人、玄孫2人に恵まれました。きれいな性格で、百歳を過ぎてても家庭菜園の畑仕事と庭の掃除をしていたそうです。お酒と和菓子が好きで、105歳くらいまで毎日少量の日本酒を嗜みました。平成14年から慶寿園で生活。それまで国内最高齢だった小山ウラさん(飯塚市)が17年4月に亡くなり、長寿日本一(米)。今年1月29日E.T.M.・ティルマンさん(米)の死去に伴い、世界最高齢に認定されました。7月2日には福智町名譽町民章と県知事の最長寿栄誉表彰、ギネス・ワールド・レコーズ社(英)から世界最高齢者の認定証が渡されました。

6月26日まで肺炎で入院したヨ子さんは、その後、慶寿園に戻り、酸素吸入器をつけて生活。回復の兆しも見られましたが、亡くなる20日ほど前から食事ができず、点滴だけになっていったそうです。このころ、声が出なかつたヨ子さんですが、目と手で感謝の気持ちを表していたといいます。亡くなる前日の8月12日は、手があがらないため、ご家族に口の動きだけで「ありがとう」と伝えました。8月13日、一日眠つた様子で、明日また起きるだろうと周囲は思っていました。眼の延長線上で永眠されたそうです。

6月26日まで肺炎で入院したヨ子さんは、その後、慶寿園に戻り、酸素吸入器をつけて生活。回復の兆しも見られましたが、亡くなる20日ほど前から食事ができず、点滴だけになっていったそうです。このころ、声が出なかつたヨ子さんですが、目と手で感謝の気持ちを表していたといいます。亡くなる前日の8月12日は、手があがらないため、ご家族に口の動きだけで「ありがとう」と伝えました。8月13日、一日眠つた様子で、明日また起きるだろうと周囲は思っていました。眼の延長線上で永眠されたそうです。



訃報を受けて、町内7か所に掲げていた横断幕や懸垂幕を降ろし、本庁と支所で半旗を掲げた行政。報道各社の断続的な取材状況に配慮し、ヨ子さんが亡くなった翌日の8月14日に、ご遺族の安永昭俊さん・安永早代子さん、慶寿園の立花敏朗施設長、浦田弘二町長が記者会見した。